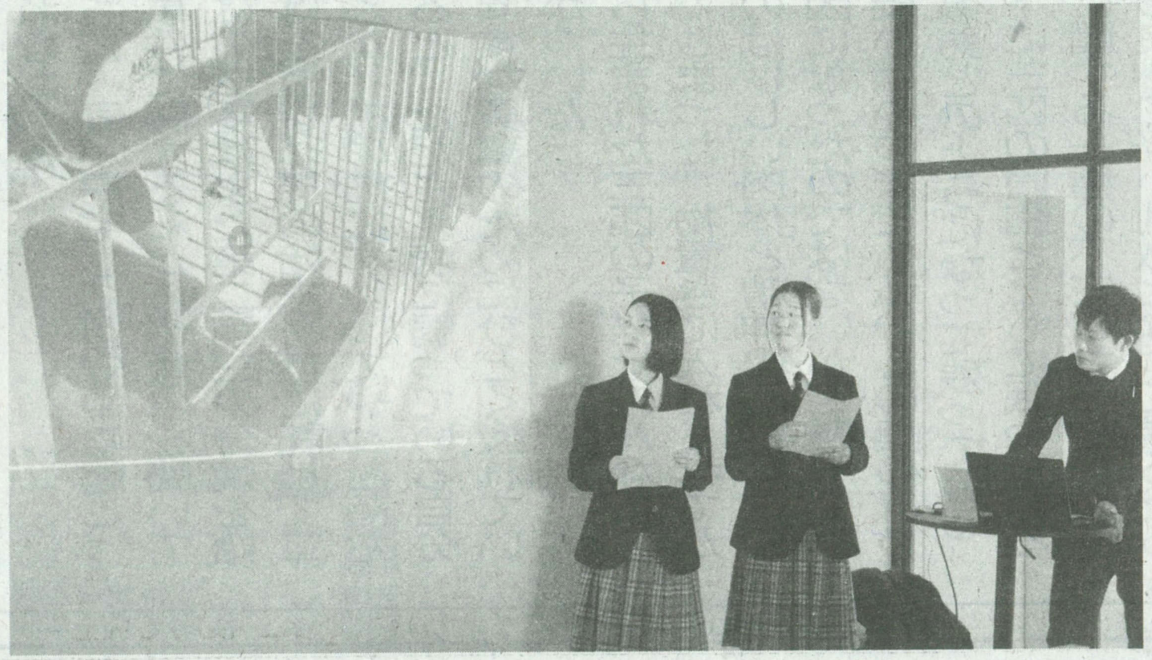
保冷剤を養豚に活用

三重化学と明野高 コラボ検証実験の成果披露



豚舎の写真を映して説明する中山さん（左）と南野さん（真ん中）＝大口町で

松阪市大口町の三重化学工業㈱（山川大輔代表取締役社長）と伊勢市の県立明野高校生産科学科がコラボ開発した豚用保冷剤を使って、畜産専攻の3年生2人が今夏、同校の豚舎で行った検証実験の結果が28日に披露された。同社本社で行われた発表会には、同社社員や、同校とコラボでエコフィード（食品製造副産物などを使った飼料）の研究を計画するミエマン醤油（度会郡玉城町）の社員らが参加した。

同校の豚舎では母豚6頭と種付けの雄豚1頭、出荷用の子豚約40頭を飼育するが、夏場に母豚の受胎率が落ちるのが課題だった。そこで同社の保冷剤を活用できないかと昨年1月から豚用保冷剤の開発に着手。昨年度の生徒がミエラボに来て大型保冷剤を製作した。

本年度は中山遥茄（はるか）さんと南野りりあさんが実験を引き継ぎ、効果的な活用法を試行錯誤し、母豚が出産する分娩（ぶんべん）用ストールと呼ぶ柵に囲まれた区画で、柵に大型保冷剤を掛けて空間全体を冷やすやり方を採用。7月1～10日に出産を控えた母豚2頭を使って効果を検証。気温が1～2度下がることを確認した。「農家への普及にはまだまだ課題がありますが、今回の実証実験では豚の暑さ、ストレスを軽減できたと思う」と話した。